

2009年
12月15日
火曜日

アメリカにおいて、新しい大統領がその抱負を述べる就任演説は、日本の首相が行う「所信表明」よりもはるかに重要な意味を持つ。何よりも国民に直接語りかけるそのスタイルは、民主主義の理念を映し出すものだが、それだけに記憶に残る「就任演説」や重要な演説は少なくない。たとえば、リンカーン大統領の「ゲティスバーグ演説」(1863)の一節、「人民の、人民のための、人民による政府は地上から消え去りはしない」はあまりにも有名であるし、また、最近ではレーガン大統領の「就任演説」にある「現在の危機的状況において、政府は問題の解決とはならない。政府が問題なのだ」は、「小さな政府」を指向する宣言であり、日本にも波及して「小泉改革」となった。このように、一連の演説は国家の戦略を明確に打ち出すものとなっている。しかし、取り組むべき課題は、時の社会情勢を反映

増永俊一 教授(アメリカ文学・文化)

アメリカ大統領就任演説.. キーワードとしての〈旅〉

して様々であっても、米国大統領が行う演説にある種普遍的に織り込まれているのは、宗教的な要素である。上記のレーガンの就任演説にも、「我々は神の元にある国家」との一節がある。

オバマ大統領の就任演説も、また例外ではない。*“the time has come to set aside childish things.”*の一節は、新約聖書「コリント信徒への手紙第1」13章11節にある「成人した今、幼子のことを棄てた」からの引用である。若い国家と見なされるアメリカも、もはや成熟期を迎えているという自覚を国民に促そうというのがこの下りの意図するところだが、引き合いに出されるのは聖書なのである。

歴代の大統領就任演説におけるこういった宗教性は、アメリカという国家の成り立ちと深く関係している。すなわち、当初イギリスの植民地であったアメリカは、宗主国の利

潤追求の手段である一方で、本国で迫害を受けていたピューリタンたちが宗教的自由を求めて移民した土地でもあった。彼らは、新大陸に理想の宗教的共同体設立を夢見て大西洋を渡ったのである。けれども、オバマ大統領の就任演説は、この宗教性を巡って従来の就任演説とは実は一線を画している。彼は、「我々は、キリスト教徒とイスラム教徒、ユダヤ教徒とヒンズー教徒、そして無宗教の人々から成る国家なのだ」という一節を演説に織り込み、歴代大統領の中で初めてアメリカの宗教的多様性を公式の場で認めた。かつてはイギリスの植民地、つまり *PLANTATIONS* のものであったこの国は、歴史を経る内に今や多様な人種、文化、宗教のひしめき合う場所となった。そして、多分に意識的に散りばめられているひとつの言葉、「旅」(*journey*)も国民の連帯を希求する。

再び歴史を遡って17世紀植民地時

代に戻れば、ピューリタンにとつては新大陸への渡航は命懸けの「旅」であった。同時にこの言葉は、約束の地を求めて40年に渉って荒野を彷徨した旧約聖書時代のユダヤの民の苦難と自らの体験を重ね合わせ、且つ人生を地上から天国に至る「旅」と捉える宗教的な感性をも包含する。さらに、植民地時代以降も地域、人種を拡大しながら大量の移民が大陸と新大陸へと渡り、それもまた「旅」であった。

アメリカは、もともとこの地に住んでいたネイティブ・アメリカン以外は、その意志に反して奴隷として強制的に移住させられた人々をも含めて、その大半が「移民」とその子孫によって構成されている国家である。「旅」は、このような国家の構成員の琴線に触れる言葉(辛い「旅」でもある)であり、同時に精神的な、あるいは宗教的な意味合いをもそこ込に込める言葉なのである。